

## 「重要文化財 神戸女学院」指定

2014年5月16日、神戸女学院は、岡田山キャンパスのヴォーリズ校舎群を国の重要文化財に指定したいという文化庁からの答申を受け、9月18日付で「重要文化財 神戸女学院」として指定された。昨年、キャンパス移転80周年を祝った直後の指定である。この指定を受け、10月3日に記念礼拝、10月12日に記念講演会が開催された。また、在米支援団体である KCC-JEE からもお祝いのメッセージをいただいた。以下はこれらの報告である。

### 報告(1)

## 神戸女学院重要文化財指定記念講演会 報告

2014年10月12日(日)、例年になく週末に天気が崩れていたので天候が心配されたが、見事な秋晴れの中、神戸女学院重要文化財指定記念講演会が開催された。台風の接近が懸念されていたこともあり、事前の申し込みよりも参加者は少なかったとはいえ、それでもメイン会場の講堂、サブ会場のホルブルック記念館あわせて約650名が集った。

13時30分、司会の飯 謙学長・学院チャプレンが開会の挨拶に立ち、創立140周年目に入る創立記念日に記念講演会を行なうことを告げると、会場からどよめきが起った。黙禱をもって開会した。

森 孝一理事長・院長の  
挨拶があった。(内容は巻頭  
の論文参照)

次に来賓の挨拶があった。

兵庫県教育委員会事務局  
参事兼文化財課長・村上裕  
道氏。今回、大学主要部分  
すべてが指定された。活用  
しているすべてが指定とな  
る初の事例といえる。世代  
を超えてつながっているの  
が教育であると思う。文化財  
というのは living heritage、  
生活の中にあってこそであ  
る。重要文化財として公の  
ものになったので、権利と  
義務が発生するということ  
を改めてかみしめていただ  
く機会にしていきたい。

西宮市教育委員会教育長・伊藤博章氏。西宮市は文教都市宣言をして50年になる。現在、大学6校、短期大学3校を有している。80年キャンパスを保持していることの大変さを思う。阪神淡路大震災を経てなお、オリジナルを保っている。使い続ける大切さを未来へつなぐという使命がある。

株式会社一粒社ヴォーリス建築事務所代表取締役所長・田中健一氏。ヴォーリスの名そのものが権威になるのではなく、キャンパス維持に対しての指定だと思う。また神戸女学院がこれからもこのキャンパスを維持していくことの覚悟を示したということで、それに敬意を表したい。

株式会社竹中工務店専務執行役員・天野直樹氏。竹中工務店はキャンパスの

重要文化財 神戸女学院 指定記念講演会

主催 学校法人神戸女学院 後援 兵庫県教育委員会 西宮市教育委員会

2014年10月12日(日)13:30 神戸女学院講堂

総合司会 学長・学院チャレン 飯 謙

< 第1部 > 13:30~14:30

◇ご 挨拶 理事長・院長 森 孝一

◇ご来賓ご挨拶

兵庫県教育委員会事務局参事兼文化財課長 村上 裕道 様  
西宮市教育委員会教育長 伊藤 博章 様  
株式会社一粒社ヴォーリス建築事務所代表取締役所長 田中 健一 様  
株式会社竹中工務店専務執行役員 天野 直樹 様  
公益社団法人神戸女学院めぐみ会会長 小澤 妙子 様  
Kobe College Corporation-JEE会長 杉 浦 剛 様

◇講 演 「神戸女学院 重要文化財へ」  
東京藝術大学大学院教授 長尾 充 氏

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪ 休 憩 ♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

< 第2部 > 14:50~16:00

◇講 演 「重文指定をうけて思うこと」  
大阪芸術大学教授 山形 政昭 氏

◇講 演 「神戸女学院建築のこころとかたちー愛神愛隣ー」  
石田忠範建築研究所代表 石田 忠範氏

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪ 終了後 ♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

学生ツアー・マイスターによるヴォーリス建築ご案内

17:00 終了予定

施工をした。先々代・藤右衛門の言葉に「美しき大仕事」とある。記録からしかわからないが、これは大きな仕事であると同時に、大変意義のある仕事という意味であろう。原型を残しながらこれまで改修等を行ってきた。教育の基本は「古くて良いもの」を残すことである。学生さんは重要文化財の中で学ぶというとんでもない事態になった。大変な意義ある学生時代を過ごすことになる。

公益社団法人神戸女学院めぐみ会会長・小澤妙子氏。同窓生の代表としてお祝いを述べたい。指定は誇らしい。ヴォーリズは「校舎が人を作る」といった。校舎に育まれてきた学生時代を思い出す。探検気分も味わった。多感な青春時代を自由な雰囲気の中で、ヴォーリズ校舎の暖かいまなざしとユーモアを肌身感じて過ごすことができた。何物にも代えがたい幸せな思い出となった。めぐみ会はこれまでも教育振興会を通じて、建物保全のための協力をさせていただいてきた。これからも微力ではあるが、精いっぱい支えていく所存である。後輩たちがこの建物によって育てられ、喜びにあふれた生活ができるようお祈りしている。

Kobe College Corporation Japan Education Exchange 会長・杉浦 剛氏。数年前、音楽学部百周年のアメリカでの演奏会の準備で、案内状を送った。その時送られてきた寄付に添えられていた手紙を読んで感激した。卒業生ではないお嬢さんが、母が生きていたら真っ先に寄付をしたであろうと書いていた。これ程に思いを寄せられている神戸女学院について考えた。教育と校舎は切っても切れない関係にある。ヴォーリズは神戸女学院の校風を設計の基礎にしたに違いない。校風を磨いて次代につないでいってほしい。校舎は有形ではあるが、有形に宿る文化は、校風と同じくらい大切である。引き継いでいくことは大きな宝物となる。

来賓の挨拶が終了した後、パワーポイントを用いるため、会場を整える間短い間が入り、第1講演に移った。長尾先生のお話は、今回の指定に至るまでの文化庁側の経緯についてであった。普通、重要文化財指定の舞台裏は垣間見る

ことさえできないので、非常に貴重なお話を伺うことができた。休憩をはさんで15時30分から第2講演が始まった。まず、司会の飯先生から、山形先生にはヴォーリズ建築の理解のためにご教授いただいている、という紹介があり、山形先生は「重要文化財指定を受けて思うこと」と題して、多くの建築物を示しながら話をされた。続いて、神戸女学院の建築コンサルタントであり、顧問でもある石田氏より「神戸女学院建築の心とかたち—愛神愛隣—」と題する第3講演があった。(講演内容は前掲論文参照)

16時、講演会は終了した。この後17時10分までキャンパス見学会が行なわれた。事前に講習を受けて校舎のことを学んでいる学生たちがツアー・マイスターとしてキャンパス案内を担当した。

好天に恵まれた一日、重要文化財指定を喜ぶひと時であった。3人の講演者方だけでなく、挨拶に立たれたお一人お一人からもこのキャンパスに対する思いの深さを感じることができた。講演会后、この報告を作るにあたって、山形先生が講演の中でご紹介くださった渡辺先生の文章の中に、この日を予言したような一文のあったことに気づいた。最後にその箇所を引用してこの報告を終えたいと思う。

「岡田山の中央に立地し、周囲の自然環境にまことに良く調和して建つクリーム色の校舎は、五〇年の年月を感じさせぬ程、しっかりと立っている。南欧調の建築様式と、見事な内装とは、いずれの日にか重要文化財の指定を受けることになるであろう。」(前掲書 p.6)

(佐伯裕加恵)

\* 前掲論文4本は、2014年10月12日に開催された神戸女学院重要文化財指定記念講演会での講演を元に、加筆訂正したものである。

## 重要文化財指定記念礼拝 「岡田山での魅力—神戸女学院の教育」

神戸女学院重要文化財指定記念講演会に先立って、10月3日(金)10時35分から大学のアッセンブリーアワーで記念礼拝が行なわれた。本学名誉教授・茂洋先生による講演があった。

茂先生は学院チャプレンとして学院のキリスト教教育を永年にわたって支え、岡田山キャンパスをこよなく愛していらっしゃる、という森孝一院長の紹介の通り、先生は学院の精神的中心としての役割を担ってこられた。その先生のお話は神戸女学院への思いの詰まったものであった。

オペラは総合芸術である。神戸女学院の教育もこれと同様、建物、自然も含めた、一人の女性の育成を目指す総合的教育である。神戸で誕生した学院の最初の移転計画である明石・大蔵谷へのキャンパス移転は大学のみを移転するというものであったが、中高大一貫教育が望ましいということで岡田山移転とい



### 式次第

司 会：チャプレン 松田 央  
奏 楽：学院オルガニスト 片桐 聖子

前 奏		奏 楽 者
讃美歌	90番(旧讃美歌)	一 同
聖 書	コリントの信徒への手紙 一 14章20節	司 会 者
講師紹介	神戸女学院院長	森 孝 一
講 演	「岡田山での魅力—神戸女学院の教育」 神戸女学院大学名誉教授	茂 洋 氏
祈 禱		
後 奏		奏 楽 者

うことになった。岡田山は櫻井氏の別邸があった場所で、現在4万坪、甲子園球場の約3倍の広さがある。設計者ヴォーリズ氏の妻・一柳満喜子氏は三田藩主・九鬼家につながる人で、九鬼家は神戸女学院創立時に大きな力となってくれた。

神戸女学院の教育理念であるリベラルアーツ教育とは、一人の人が成熟する教育のことである。岡田山の中心線は中庭を通っている。Literature, Science and Conservatory そして永遠の神によってそれらが包み込まれる、この構図が基本である。キャンパス建設費はアメリカからの献金による。キャンパスが完成した1933年という年は重要で、日本の国際連盟脱退に始まる戦争の時代の始まりである。戦時中、学内工場が作られ、グラウンドが畑になったが、聖書を講壇から降ろさなかった。2度目の西宮空襲の時に文学館の屋根が被災し、戦後黒瓦になったが、創立100周年の時に復元して7色の瓦に戻した。オート社のパイプオルガンも講堂に入った。1995年1月17日に起こった阪神淡路大震災でパイプオルガンは被災したが、ボッシュ社の修理で復活した。講堂のランプはみな割れてしまったので、今はアクリル製のランプシェードになっている。などなど、戦災、震災を乗り越えて、このキャンパスは80年維持されてきた。教育の豊かさとは何か。それは、一人の人間として自らを深め、高められるように成熟していけるような教育のことである。

今回の記念礼拝は、12日開催の記念講演会が休日であり、申し込み制であったため、誰もが参加することができないものであったので、とりわけ大学生にとっては学院の歴史と教育、キャンパスについて聞くことのできる貴重な機会となった。また、一般公開となっていたので、卒業生、旧教職員も話を聞くことができた。そのため、礼拝終了後、理事室でミニ懇話会が開かれ、現教職員だけでなく懐かしい方々も参加されて、茂先生を囲んで和やかなひと時が持たれた。

(茂先生には2009年に教職員向けに神戸女学院のキャンパスと教育についての講演をしていただいていた、2010年10月発行の『学院史料』第24号に「神戸女学院岡田山キャンパスとリベラルアーツ教育」というタイトルでその内容を掲載している。)